



「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。

(テモテへの手紙一 1章15節)

「清教学園はキリスト教の学校ですから、どんなに悪い事をしてもらえていいのでしょうか？」

「あの先生は、しょっちゅう怒っていて、クリスチャンらしくないですね。」

校長として学園で勤務していると、よく頂く質問やコメントです。キリスト教やクリスチャンという存在に対する一つのイメージがあるようです。

確かに、神様は愛の神であり、人を愛し、憐れみ深く恵みに満ち、罪を赦してくださるお方である、と聖書に記されています。しかし同時に、神様は正義の神であり、罪をそのまま見過ごすことはされません。罪には罰が伴います。

聖書によると、創り主である神様を無視して自分勝手に生きている私たちは皆、罪人であり、罪の罰を免れない、とされています。つまり、神様は私たちが愛しておられる、けれども私たちの罪を見過ごしにすることはできない、という葛藤が生じます。

この矛盾、葛藤を解決するために、神様は驚くべき方法を取られました。ご自身の独り子、神の御子であるイエスキリストを私たちの身代わりとして、十字架の上でその罪を背負わせ、罰を加えることで、信じる者を救う道を開かれたのです。「信じる者は救われる」という言葉は、成功を信じて突き進む者には道が開かれる、という意味で使われることも多いようですが、イエスキリストを信じる者が罪を赦されて救われるというのが本来の意味です。

「何故、信じる者だけなのですか。愛の神ならば皆を救うべきではないですか。不公平ではありませんか。」これもよく頂く質問です。しかし、本当に不公平でしょうか。たとえば無差別殺人で何人もの命を奪った犯罪者が、悔い改めて神様を信じることもなく救われて天国に行き、被害者の隣で悠々自適の生活を送っている、それこそ不公平ではないかと思うのです。

少し横道に逸れましたが、上記から分かるように、クリスチャンとは、清廉潔白な聖人君子を指すのではなく、「赦された罪人」を指すのです。神様を信じて歩んではいますが、当然、それぞれに個性があり、この世においては様々な欠点や弱さも抱えて生活をしているはずで

す。神様が罪人を正しく裁かれるのですから、キリスト教主義の学校においては何でも赦される、というのは間違いです。犯してしまった過ちや失敗には、愛の配慮を土台としながらも適切な対応を検討し、実行します。場合によっては、厳しい対処もあり得ます。

冒頭の聖句は、初代教会の大伝道者パウロの言葉ですが、当初教会を迫害していた自分自身を「罪人の中で最たる者」と告白しています。そのような自分を救い、使徒として、伝道者として立たせてくださった神様の恵みと、イエスキリストの救いの素晴らしさを訴えているのです。

高校の二学期始業式で、私は以下の聖句を選んで読んでいただきました。「**初めからのことを思い出すな。昔のことを思いめぐらすな。見よ、新しいことをわたしは行う。**」(イザヤ書43章18～19節)

過去の失敗、嫌な思い出に縛られている人はいるでしょうか。残酷な迫害者であったパウロを罪の縄目から救い出し、教会の指導者として立たせ、「新しいことをわたしは行う」と約束して下さっている神様を信頼し、弱さや悩みを抱えつつも喜びと平安を頂いて前に向かって進み出した多くの人たちに倣って、あなたも歩み出しませんか？

